

韓国文学の禁忌と自由——解放以降について——

元 秀一（ウオン スイル）

序

韓半島は一九一〇年日本帝国主義に併合され三十六年にわたる植民地の苦渋を舐めることになった。日本帝国主義の植民地政策は天皇という神を戴く皇国の臣民化を強いることで韓民族から土地と言語と名前を奪い取る苛酷なものだった。土地を奪われた民衆は故郷を離れ他郷へと流れるほかなかった。いや、強制連行で蝸部屋に押し込められ炭鉱の暗い坑内で無念の死を迎えた青年もいた。

韓半島は日本帝国主義の連合国に対する全面降伏を以て植民地統治から解放された。解放の歓喜も束の間で韓半島は米ソの冷戦対立構造が突出した危険な火薬庫となった。実際、三十八度線を境に南北に分断され、それが基に朝鮮戦争（6・25動乱）が勃発し、深い傷痕を残す。

韓半島は三十八度線の北が朝鮮民主主義人民共和国、南が大韓民国という一民族二国家体制を受け入れざるをえない政治力学の犠牲

となった。北は共産主義体制、南は資本主義体制と相容れない国家造りに血眼になっていく。

また、北が主体思想による特異な鎖国政策を推し進める一方で、外勢に依存して経済の高度成長を推し進める南の独裁政権は反共という思想的呪縛を強いてきた。

この論考は解放後の韓国で書かれた文学作品に焦点を当て、韓国文学の禁忌と自由なるものの実体を探っていくことになるだろう。

韓国文学には植民地と朝鮮戦争による傷痕が投影されている。とりわけ、南北分断の現実が重く韓国文学に蔽いかぶさっている。分断の桎梏は反共の思想的呪縛と同義である。韓国の作家はこうした政治状況即禁忌にあつていかに精神の自由を得ることができるか。自由を標榜する資本主義体制にあつて表現の自由が抑圧される矛盾は韓国に限られた事象ではない。

日本においても桐山襲の『パルチザン伝説』¹⁾は天皇を素材にしたことで右翼の恫喝に遇った。それは天皇を扱うこと自体が禁忌だか

らである。ただ、主権在民となった戦後日本では体制が公権力で弾圧することはない。一つの団体に過ぎない右翼結社が抑圧を担っている。表面的には自由を謳歌しているのが日本である。かつて野坂昭如は「自分の書いたもので右翼が攻撃してきたら、自分は怯えてペンを折る」と正直に吐露していたのを私は記憶している。

自由の女神で象徴されるアメリカ合衆国においても一九五十年から一九五十四年にかけてのマッカーシー旋風と呼ばれる「赤狩り」があった。ちょうど朝鮮戦争とオーバードラップする時代のことだ。アーウィン・ショーの『乱れた大気』⁽²⁾（工藤政司訳）は「赤狩り」を扱った長編小説である。アーウィン・ショーはこの長編を発表したことで故国を離れざるを得なくなった。「赤狩り」は米ソ冷戦構造が生んだ鬼つ子といえようか。

韓国はこの米ソ冷戦構造の真正な鬼つ子であることを今日も頑なに死守している。反共と国家保安法が「赤狩り」の武器となっている。しかし、ベルリンの壁の崩壊とソ連の崩壊は共産主義の牙城の喪失を意味する。それでも、なお北は共産主義体制下にある。歴史の皮肉か。

ちっぽけな半島を二分され相互に不信と憎悪と敵対を強いられてきた国の悲劇ははたして癒され、信頼と愛情と和合を回復することが可能なのか。

韓国の作家は困難な思想的呪縛の中にあつてなお精神の自由を追い求める。作家の存在事由が表現することにあるわけだから、思想

的呪縛があらうと表現しないことには作家の生が得られない。

では、個々の作品を概観していくことにする。

数字付きのかつごとに作品名と作者名を表わしている。

①は作品発表年、②は作品の時代背景、③は作品の粗筋、そして、作品の引用、最後に作品に対する私評という構成になっている。

(1) 『背面』⁽³⁾ 鮮于燁（ソンウヒ）

① 1976年

② 1945年敗戦直後。（フィリピン）

③ 日本軍戦犯収容所で米軍捕虜を虐待した林伍長を取り調べるウッド中尉の困惑と通訳五木少尉のうしろめたさ。林伍長は植民地統治下の田舎の農夫暮らしに限界を感じて、帝国陸軍に志願した朝鮮人だ。米軍虐待は森軍曹の命令によるものであった。しかし、直接捕虜に手を下したのは林伍長だった。上官の命令は天皇の命令であると信じて疑わなかった林伍長は米軍の憎悪を一身に背負う。森軍曹はウッド中尉の訊問で林伍長に命令した事実を否定し、延命を図ろうとする。

〔引用一〕

訊問の終わりに森軍曹は突然一言付け加えた。

「彼は朝鮮人だからであります」

ウッド中尉は混乱する。

「朝鮮人？」

「日本人ではないということですか」

「日本人ではない？ 林が？」

「そうです」

「彼が日本人でなければ、いったい何だと言うのか。馬か、牛でなければ犬だと言うのか」

五木はあわてて答えた。

「コリアン。そう、彼はコリアンです」

「コリアン？」

ウッド中尉は言葉尻をうんとあげた。

太平洋戦争が終わったばかりという時期である。米軍の一中尉のアジアに関する知識の中に朝鮮はなく、コリアンがどういう人種か、すぐにわかるはずはなかった。

〔引用二〕

五木が、背後にかかっているアジア地域の地図に近寄り、小さい一点を指した。ようやくウッド中尉は、米第八軍がその南半分を占領している半島がコリアであり、その住民がコリアンであることをあらためて悟った。

〔引用三〕

林は急いで森の喉に両手を持っていった。そして、練りに練った計画どおりではなく、一気に全身の力を指に集めて押した。ポカンと開かれた森の両目に、複雑な当惑と恐怖の色がいつぱいに拡がった。

〔引用四〕

同じ朝鮮人でありながら、故郷に残った者と故郷を離れた者がある。罪を犯して死ななければならぬ者と、罪を犯さずに生き残る者がある。彼ははじめ、人間としての罪を感じたのだった。

〔私評〕

亡国の民が生きる価値を見つるべく能動的に志願した軍に翻弄され、裏切られた林への鎮魂が込められた作品となっている。大島渚監督作品『戦場のメリークリスマス』で捕虜収容所の軍曹役を演じたビートたけしは林伍長に重なるとみていいだろう。

林伍長のような植民地支配の痛ましい犠牲者は類例がない。精神と魂を宗主国の軍隊に捧げた報いが戦犯者としての死だったのだから。それゆえに、林伍長は上官の命令は天皇の命令であるという絶

対服従の規律を強いてきた上官森軍曹の背信に憤激し、殺意を抱いたわけだ。皇国臣民とはあたかも支配・被支配の関係を無化し、彼と我が等しく天皇の赤子であるかのよう思わせる幻想でしかなかった。

心のねじれは森軍曹を殺害しても解かれることはなかった。林が処刑を目前に自らを觀照し、「同じ朝鮮人でありながら、故郷に戻った者と故郷を離れた者とがある。罪を犯して死ななければならぬ者と、罪を犯さずに生き残る者とがある。彼ははじめて、人間としての罪を感じたのだった。」ゆえに林は心のねじれを解き放つことができたといえる。

作者の眼差しは「彼ははじめて、人間としての罪を感じたのだった」という点に集約されている。

こうともいえはしないだろうか。

林を皇国臣民に隷属するいびつさから人間へと還元することで作
者自身がカタルシスを得た、と。

(2) 『丘殺』金源一（キム ウォニル）

① 1973年

② 1948年8月ソウル

③ 抗日闘士金九をモデルにしたチェ・ドンジュン先生が露地で暗殺される。たまたま傍を通り掛かったホ・モクチン君が容疑者として逮捕される。アメリカ留学に憧れるキム・シンテ君が真犯人であ

るが、キム・シンテ君は李先生という謎の人物にチェ・ドンジュン先生の暗殺を依頼されていた。

すべては計画的な国家的謀略であった。ホ・モクチン君は何ものかに手引きされてチェ・ドンジュン先生暗殺現場に居合わせるように仕組まれていたわけだ。罾に落ちたホ・モクチン君を待ち受けるのは拷問死以外になかった。彼は拷問の苦痛に呻吟しながら不条理な濡れ衣を凝視する。

〔引用一〕

しかし光復を迎えたこの地、今や心安らかに息つくことのできるこの祖国の地で、同胞の手で死ぬことはできないという思いが、しだいに薄らいでゆく意識の中から一筋の冷泉のように吹き上げてきた。

〔引用二〕

チェ・ドンジュン先生の暗殺犯ホ・モクチン君が、収監された監房で手首の動脈を切って自殺したという内容が記事になったのは、それから三日後だった。社会面のトップを飾ったその記事は続けて、チェ・ドンジュン先生暗殺の背後団体と推定される〇〇政党幹部らの檢挙旋風が嵐のように巻き起こったとい

うところで結ばれていた。

その記事とともに社会面の隅に、越北を試みた小型スパイ船一隻が海岸警視庁の警備艇によって江陵沖で沈没させられたという記事も載っていた。その船に乗っていた身元未詳のスパイ一名は船とともに海に沈んだということである。しかしその船に乗った者がキム・シンテ君であるという事実について、またその船をなぜ沈没させたかについて知っている人は、縁なし眼鏡の李先生とその他数名の者たちだけであった。

〔私評〕

解放後の朝鮮半島の南北分断固定化に陥る恐れがあった南半分のみ単独選挙を阻止する大きな動きに金九のピョンヤン訪問があった。金九は右翼の大物であったが、単独選挙は民族を分断させる害悪として断固反対の姿勢を貫いた。金九が北と話し合いすることに危機感を抱いた権力は金九暗殺に動く。金九暗殺は朝鮮半島の分断固定化を促す象徴的な事件といえる。

作者の金源一は出来事に深入りする感情移入は回避しつつ、引用二の文脈からもわかるように、むしろ、あたかも三面記事を扱うかのように歴史の悲劇をフィクションライズさせている。

(3) 「トリヨン岬の鳥」玄基栄（ヒョンギヨン）

韓国文学の禁忌と自由

① 1979年

② 1948年濟州島四・三事件後

③ 擎漢山に潜むゲリラ掃射作戦の一つとして焼き払われた老衝（ノヒョン）村出身の貴日宅（キリルチブ）は城壁を築く作業班にいた。貴日宅の亭主は純朴さゆえに警察からは「アカ」と疑われ、ゲリラ側からは「反動分子」の烙印を押され、やむにやまらず洞窟に逃げ込む。

亭主の安否を気遣う貴日宅は焼き払われた老衝の家に隠してきた食物が自分の思うようにならない事態に忿懣やるかたない。だが、ゲリラ弾圧に躍起になる政府が発令した戒厳令下にあるため、自由行動は許されない。結果、乳飲み子を餓死させてしまう。

三人いた子供は一人がコレラで死に、一人は餓死し、残されたのは小学四年生のスンウォン一人である。貴日宅の楽しみはスンウォンと会うことだ。しかし、せつかくスンウォンと会っても持たせる食物がない。

〔引用一〕

ニッポンドでまっとうな人間の首にねらいをつけ、人が肝を潰すほど凄んだあいつも同類だ。日本の巡査がチョオセンジンの首を切っていた、ぞつとするニッポンドを新生国の新警官が使うなんて！ あのからすの鳥（オ）は三十八度線を越えて逃

げてきた北出身だ。

〔引用二〕

ところで昨日会ったビルジェの母ちゃんの話では、うちのス
ンウォンは食い物の物乞いで学校には行けないというではない
か。あの幼い子が、いつの間にか縄を縛うことを覚えたんだか、
毎日縄を一巻き肩に背負って、家を回りながら食べ物と交換
してるとか。たちまち熱い涙があふれてくる。やめだ、まだス
ンウォンのことを考えるのは早い。貴日宅はあわてて目をしば
たき、出かけた涙を元にひっこめた。

〔引用三〕

こんな騒乱のときには亡くなった仏さんだっておなかを空か
せるものだ。食べるものといつたってフスマの芋汁でしかない。
中略。貴日宅はさきおととい義父を弔う朔祭（死者の喪に服す
三年の間、毎月一日と一五日に行なう祭事）に、そのためにと
っておいたちょうど一握りの粟で御飯を炊いてそなえた。

〔引用四〕

どうにかしてスンウォンに雑穀を五升でも準備してやらなき
やならんのに。疎開するときに持ってきた屏風を売り払おうか。
とんでもない、それはだめよ。

〔引用五〕

「あれ、見て」

と、言うので、ヨンスンのかあちゃんが指すほうを見た。幸い
他の死骸の下に入っていて、からすの嘴についばまれず、無傷
のままの顔、あご髭がぼうぼうに生え、顔を半分ほど覆ってい
るが、それはまぎれもなくうちのとうちゃんだ。胸がはりさけ
そうに高鳴った。どうしよう。どうしようか。

「あの穴に入っちゃまうと、後になって、亡骸を金輪際みつけれ
へんよ……」

ヨンスンの母ちゃんも気がないといったふう心配した。
「あの石垣の後に隠さityいけんね」

貴日宅はすぐさま頭の手拭いはずして死骸の顔を覆った。

ヨンスンのかあちゃんも自分の手拭いはずして差し出した。
「からすが顔を痛めんようにしようとなら、もつとたんと被せ
んならんね」

二人は死骸を持ち上げ担架に乗せたあと、周囲を窺った。う
まいぐあいに、からすの鳥はこちらに背を向けたまま、石の上

に座ってトリヨン峠の方を眺めていた。

〔私評〕

この作品は長く禁忌とされ歴史の暗闇に葬り去られていた四・三事件をテーマにしている。四・三事件をライフワークとする金石範の名作『鴉の死』は1967年に新興書房から出版されている。

四・三事件がなぜ禁忌であるのか。それは植民地解放後に韓半島の南に駐留したアメリカ軍政の暗部を照射し白日の下にさらすことになるからにはほかならない。信託統治を経て南と北は一つになる予定だった。にもかかわらず李承晩政権は南半部だけの単独選挙を挙行しようとした。単独選挙は分断固定化につながりかねない。

だからこそ、右翼の大物であった金九は敢えて敵対関係にある北に赴き和合を模索する。しかし、金九は志半ばで暗殺された。韓半島は米ソ冷戦構造の前衛を担わされたことで分断されるか、一つになるかという混乱と謀略と暴虐の坩堝と化していく。

四・三事件はこうした背景から発生した。

さて、引用一で「あのからすの烏(オ)は三十八度線を越えて逃げてきた北出身だ」とある。共産化された北の地主や両班等の特権階級は土地を没収され命からがら南へと逃れてきただけに「アカ」に対する憎悪は根が深い。越南してきた逃避組の右翼は西北会を結成し反共体制の急先鋒となる。

濟州島に投入された西北会は四・三事件で蜂起した民衆を「アカ」と決め付け殺戮する。当然ながら民衆は抗い、多くは山をアジトにゲリラ活動する。

貴日宅の亭主が純朴さゆえに警察からは「アカ」の嫌疑をかけられ、ゲリラからは「反動分子」と烙印を押される状況は、米ソ冷戦構造の前衛を担わされたことで分断されるか、一つになるかという混乱と謀略と暴虐の坩堝と化す時代を象徴しているといえよう。

(4) 『興南撤収』金東里(キム ドンニ)

① 1955年

② 1950年冬

③ 朝鮮戦争が勃発した1950年十一月末国連軍は豆満江付近まで進攻する勢いにあつた。「従軍文化班」の名の下にソウルから興南に來た詩人パク・チョルは連れの画家イ・チョンシクと声楽家キム・ソンドウクと3人で「慰安の夕べ」を開催した。「慰安の夕べ」は「アカ」に洗脳された民衆の「啓蒙」活動の一貫でもあつた。

この「慰安の夕べ」で三人が投宿した家の娘シジョンが「鳳仙花」を歌い聴衆の涙を誘わないではいかなかった。パク・チョルの勧めもあつてシジョンはソウル行きの夢を持つ。そんな折り、「中共軍」の参戦で情勢は一変した。西北戦線の部隊は撤収を開始し、興南が位置する東北戦線の撤収も時間の問題であつた。

シジョンにはてんかん持ちの姉スジョンがいた。父(ユン老人)

も虚弱であった。ユン老人はシジョンのソウル行きには反対だった。だけど、「アカ」が進攻してきたとなれば、「啓蒙」に協力した罪でシジョンが抹殺されるのは必定といえた。シジョンはユン老人の反対を押し切ってソウル行きを決意する。仕方なくユン老人もスジョンと共にソウルに行く決心を固める。興南の港は撤収する国連軍と避難でこたがえし、焦燥と恐怖の絶頂にあった。

〔引用一〕

「今度で南北が統一したらシジョンもわれわれといっしょにソウルに行こう、ソウルに行つて勉強するんだ」

チョルは漠然とした希望を抱いてこう言った。

シジョンはこのことばに、急に両目を輝かせ、クルツと方言に変わつて、

「統一はいつ頃？」と尋ねた。

〔引用二〕

彼の目には姑にあずけてきた子どもたちの顔がちらつきはじめた。六・二五では妻を共産党に殺され、今度はまた子どもたちまで失うことになりはしまいかという思いに、胸はちぎれるようにうずき痛んだ。

〔引用三〕

国連軍（国軍を含んだ）の興南集結と時を同じくして清津以南、元山以北の住民も雪の中を歩ける壮丁と自由に目覚めはじめた同胞十余万名が興南に集まつてきた。

〔引用四〕

スジョンの体の発作が止んだのは、LSTの扉が閉じる四、五分前だった。顔色は紙のように真白く血の気が引き、手足のぐったりしたスジョンをはじめはユン老人が背負った。しかしユン老人は三步も歩けないで突然どこかをひねったように左側の胸に手を当ててその場にうずくまってしまった。略。スジョンの体重より軽くもない米袋とふろしき包みをかついで咳込みながらやつと立ち上がったユン老人は、しかしスジョンの後ろに従つて真つすぐ歩くことができず、横に二、三步よろけ、折しも襲つた吹雪にふたたび咳き込んだかと思うや、そのまま海にばしゃんと落ち込んでしまった。略。すぐ後ろについてくると思つていた父親が見えず、頭をあげた時、二十歩余り向こうで父親が海に落ちるところを見たシジョンは、

「父さん！」

という、悲鳴とともに頭に載せていた包みもかまわず投げ捨て

たまま埠頭の上に駆け出した。

〔私評〕

濟州島四・三事件の二年後、一九五〇年六月二十五日に朝鮮戦争が勃発した。米ソ冷戦構造の最前線を象徴する三十八度線は火薬庫であつたわけだ。同じ民族が敵対する朝鮮戦争の混乱と悲惨をシジョンの可憐さと人情に投影することでこの作品は成立している。

引用一における Chol とシジョンの遣り取りは民族の願いでもあつて、三十八度線以北に居住するシジョンのソウル行きを叶える夢でもあつた。だが、中共軍の参戦で情勢が一変し、無残にも民族の願いとシジョンの夢は砕け散る。「従軍文化班」の Chol の視点から描かれたこの作品は反共の陰影を帯びてはいるが、シジョンのけなげな夢と挫折を濾過することで完成度の高い小説に仕上がつていてといえるだろう。

(5) 『いらだつ人々』^(?) 李浩哲 (イ ホ Chol)

① 1962年

② 1961年五月

③ 現役を引退してほげがきた元頭取の老主人は、五月のある夜、いつものように以北に嫁に行つたきりの上の娘が十二時に帰つてくる、という。そこで、下の娘英姫と長男の嫁貞愛が老主人の傍らに

座つて一緒に待つ。

長男の成植はアメリカ留学までしていながら定職をもたず昼間からパジャマ姿でいる。貞愛との夫婦仲もうまくいっていない。妹の英姫からも軽蔑されている。以北に嫁いだ姉の夫のいとこであるという因縁で居候になつている善哉が十二時近くに帰つてくる。

しかし、ぐでんぐでんに酔つぱらつた善哉は玄関前で嘔吐する。英姫は善哉の吐瀉物を両手に受けとめながら高笑いする。バラバラに壊れた家族をかううじてまとめているのは以北に嫁に行つたきりの娘を待つ老主人の存在といえた。

〔引用一〕

略、母は安らかである。あの世に行つて安らかである。傾いていく家運に心煩わせることなく安らかである。カーンカーン、カーンカーン。あの音はきつとこの家を押しつぶしてしまうだろう。この家の守り主の大蛇も目をさまし、そろりそろり姿を現わす時が来たようだ。そして饗宴、最後の饗宴だ。心置きなく別れを告げねばならないだろう。みな心置きなく別れを告げねばならないだろう。

〔引用二〕

「何だってことさら十二時じゃないといけないの」

英姫が言った。

「さあ」

貞愛が答えた。

「ほんとうに帰って来るのならいいんだけど」

と英姫が言った。その言葉に貞愛が応じた。

「そうね、もしほんとうに帰って来たら」

「考えてみたらおかしいわ」

英姫が笑いもせずには笑うまねだけした。やがてそれを止めて

冗談めかして言った。

「いつそわたしたちみんな別れましようよ。暮らしは何とかなるわ。散り散りに別れる、何てことないわよ。簡単じゃない？

むしろ」

〔引用三〕

そして、今やこういうことに誰もがうんざりしていた。結局この待つことの饗宴は老主人がまだこの家の主人であることを暗示してくれていた。上の娘が帰ってくると老主人が我を張れば、迎える支度をしなければならなかった。そうやって待つ態勢を取ると、本当に帰ってくるような気になるのだった。

〔引用四〕

その瞬間、柱時計が十二時を打ち始めた。三人はいっせいに時計に視線を集めた。部屋の中がざわめいた。時計を見つけていた三人の視線が、ふたたび老主人の方へ移った。鼻先のイボをいじくっていた老主人がとまどった表情で息子と嫁と娘を交互に見つめた。

〔私評〕

朝鮮戦争が休戦し、平和な日常に戻ったとはいえ離散家族の悲哀と崩壊が忍び寄る狂気を劇作的手法で描いた作品だ。狂気を暗示する「カーンカーン カーンカーン」という金属音が効果的に使われている。

ばけがきた元銀行頭取の老主人は真夜中の十二時に北から上の娘が帰ってくると信じている。老主人の思いは信仰に近いものもある。家族は理性ではばかげたことだと反発しながらも引用三のように、

「上の娘が帰ってくると老主人が我を張れば、迎える支度をしなければならなかった。そうやって待つ態勢を取ると、本当に帰ってくるような気になるのだった。」

狂気が崩壊に向かいつつある家族を一つに束ねる。この狂気は離

散した家族との再会を願ひ、信じる情念に裏打ちされたものといえようか。それゆゑ、家族は否応でも狂気に呪縛されるほかないわけだ。この狂気は『長雨』におけるゲリラとして逃避行する少年の叔父が占いによる「ある日ある時刻」に戻つてくると信じて待つ祖母の狂気に通底するものである。

作者李浩哲は越南した失郷民だ。『いらだつ人々』は失郷民の狂気と悲哀を描いた作品でもある。しかし、故郷についての描写は一切ない。それは禁忌であつた。故郷についての描写は一九八四年から十余年の歳月を掛けて一九九六年に完成した長編『南のひと北のひと』まで待たねばならなかつた。『南のひと北のひと』は朝鮮戦争時の故郷と民族を描いた、禁忌を打ち破る小説である。『南のひと北のひと』は大韓民国芸術賞と大山文学賞を受賞している。ある意味、成熟した韓国を象徴する作品ではないか。

(6) 『長雨』尹興吉(ユン フンギル)

① 1973年

② 1951年六月

③ 動乱に追われて少年の家に身を寄せる外祖母(ウエハルモニ)の息子である外叔父(ウエサムチョン)は国軍に志願して戦死した。一方、祖母(ハルモニ)の息子である叔父(サムチョン)は孤立したパルチザン兵士で建知山に潜んでいる。鬱陶しく降り続く長雨の中、叔父は叔母(コモ)の手引きで真夜中少年の家に現われる。少

年の父と祖母が叔父に自首することをすすめる。頑なに拒否していた叔父がその気になつた時、外で何か物音がした。叔父は反射的に裏戸を蹴破つて竹藪の中へと逃げる。この有様を少年は刑事の誘導に乗せられて克明に喋つてしまう。少年の父は拷問を受ける。少年は密告した罰として監禁状態に置かれる。外祖母が唯一の味方であつた。祖母は占い師に息子の安否をみてもらう。すると、占い師は「ある日ある時刻」に叔父はかならず現われると告げる。祖母は「ある日ある時刻」に備えて待つ。

〔引用二〕

略。何より心配なのは、祖母と外祖母の不和であつた。略。二人の間に、いつとなくひびが入りだしたのは、あの事件―はくが見知らぬ人の誘惑に乗つて菓子をもらい食ひしたこと、祖母の憤怒を買つてからであつた。略。つぎにこの二人を離反させてしまつた決定的な契機は、戦死通知書をうけたその翌日にやつてきた。まず腹に据えかねて口火を切つたのは、外祖母の方であつた。その日の午後も、長竿のような稲光が建知山の嶺々に、ぶすつと突き刺される険悪な天気だったが、縁側に立つてその光景を見つめていた外祖母が、突然おそろしい呪いの言葉を吐きはじめたのだつた。

「もつと落ちろ！ どうかもう一ぺん落ちて、岩間にかくれた

アカまでみんなやつつけておくれ！ 森に潜んでいるアカを、炭火のように全部燃やしてしまえ！ もう一度、もう一度、よし！ 神様ありがとうございます！」

〔引用二〕

部屋の中がしばらく静かになった。誰も口をひらけないような索漠たる雰囲気のようなだった。そうした間も、ぼくの耳の中には、拳銃と手榴弾をさげたまま夜更けにこっそり隠れて入ってきた人の、その太い肉声はまだじんじん響いていた。略。ぼくの記憶にある叔父は、どんな席にでも入っていき、あたり構わず豪放な笑いを飛ばし、自分とは全然利害関係のない他人の事にもよく割り込んで、座の雰囲気をできるだけ賑やかに取り持ちながら、訳もなく興奮して感動してしまう人間であった。だが、どう考えてみても、最前のあの声は紛れもなく叔父の声であった。変貌した声のように、険悪になったかもしれない叔父の顔つきを、ぼくは想像してみた。

〔引用三〕

略。しかし、祖母は少しの遠慮もなく、夜が更けるまで質問をひとり占めしていた。

「おまえのいう通りなら、人手は大勢いるようだけど、何といても男衆ばかりだからな。ご飯とか汁物とかはいつたい誰がつくるんだよ？」

「自分たちでしますよ。なあにそんなものくらい」

「漬物（キムチ）や和え物のようなおかずもか？」

「はい」

「ほんとうにまあ！ このおれでも側にいれば、そんな時味つけでもやつてやれるのによ……」

「……」

「それで、口に合うのかい？」

「心配ないよ」

〔引用四〕

一番鶏が啼く声が聞こえてきた。雄鶏のながい啼き声をきき、叔父はびつくりした表情で家族たちを見回した。みじかい夏の夜が、もうじき明けようとしていた。

「人を殺したんですよ」重荷を負ってしゃがみこんだ人のように、虚ろな声でそうつぶやいた。「それも、とてもたくさん……」
こうして叔父は結局自首することを決心した。

〔引用五〕

盲の占い師が予言したというその日が、じわりじわりと迫ってきた。天候は依然としてぐずつき、人びとはみな疲れきっていた。祖母ひとり例外にして、今や誰もが疲れきっていた。本当に疲れただけに疲れきっていた。待つことにも、降りつづける長雨にも。

〔引用六〕

頂点に達した混乱の合間を縫って、大蛇は露葵とちしやがはえている庭畑の畝をくぐり抜け、いつの間にかやら柿の木にのぼっていた。略。外祖母は両手をゆっくり胸の前へ寄せて合掌した。

「おや、あんただったのかい、家のことが忘れられなくて、こんなに遠い道を訪ねてきなされたのか？」

まるで泣きながらむずかる赤子に、子守歌でもうたつてあげような調子で、静かにささやくのを聞いて、誰か大声で笑う人がいた。

「どこの穀つぶしの馬鹿野郎がせせら笑っているんだい。どいつだ、はやくここへ、さっさと出て来やがれ。罰当りめ！」

外祖母の大喝一声に、人びとは全く声も出なかった。外祖母は向きをかえて、再び大蛇を相手にした。

「あんたもみてのとおり、年とつたおふくろさんも達者だし、

他の家族たちも、みんな元気に暮らしているんだよ。だからよお、うちのことは、なんの心配もいらんのだから、はようはよう、あんたの行かねばなんねえとこへ、さっさと行きなされ」

〔引用七〕

考えようによつては、祖母のながい一生のうちで、寝もせず食べもしないで驚くべき氣力をふるい、何日もの間家族たちをやきもきさせながら、叔父の帰りを待っていたとても短い時間こそが、いわば消える直前に一瞬ぱつと燃えあがる蠟燭の燦きのような、最も誇らしく幸福にみちた時間であったのだろう。

臨終の席で、祖母はぼくの手をとり、ぼくの過去のすべてを許してくれた。

〔私評〕

長雨が降りしきる片田舎の一家を襲う動乱（朝鮮戦争）の悲劇を少年の目を通してシャーマニズム的土俗が匂う文体で描かれている。韓国では母方の叔父、叔母を父方のそれと区別するために「外（ウエ）」を接頭語とし、「外叔父（ウエサムチョン）」、「外祖母（ウエハルモニ）」と呼称する。母方の叔母は「イモ」と呼称する。一族の系譜を代々記録する族譜（ジョッポ）を家宝の一つとする因習がある

韓国は呼称を厳格にすることで「内」と「外」を明確化させようとした。現代でも同じ姓の「金(キム)」でも祖先の出自を特定する本質(ボングアン)が「金海(キメ)」と「光山(クワンサン)」では婚姻ができるが「金海」同士、「光山」同士では禁忌とされている。

さて、祖母と外祖母の間に生じた敵対関係の要因は互いの息子がゲリラ(アカ)と国軍という立場からきている。不幸なことに外祖母の息子は戦死した。息子の死を慨嘆する外祖母の憎悪は引用一からわかるように「アカ」の呪咀へと向かう。だが、「アカ」を呪咀することは祖母の息子を呪咀するに等しい行為である。祖母が外祖母に反発を覚えるのは無理からぬことといえよう。外祖母は孤立する。

こうした状況下でゲリラの叔父が叔母の手引きで深夜密かに帰宅する。この帰宅は叔父を警察に自首させるための布石であった。少年が眠りの床で聞いた叔父の声はゲリラになる前の快活さは影をひそめ、不気味で険悪なものに変質していた。おそらく叔父は猜疑心と恐怖心で顔付まで変わったのだろう。

引用三からもわかるように祖母にとつては息子である叔父がゲリラ活動による生活の不自由さに心配がいく。叔父にとつてはどうでもいいことが祖母には最大の関心事なのだ。引用三の遣り取りは韓国(というよりは母性そのもの)をよく描写している。

作者の尹興吉は長編小説『母(エミ)』でこの母性をもっと掘り下げて描いている。また、長編小説『鎌』では朝鮮戦争の内なる殺戮と

憎悪と傷痕を書き上げている。宋基元の短篇小説『月夜を行く』も『鎌』と同質の主題を扱っている。

叔父の猜疑心と恐怖心は引用四の苦悩から来るものであった。叔父は村人を多数殺戮した。だから、自首したところで銃殺されるに決まっていると震え慄いていたのだ。しかし、家族の粘り強い説得で自首する決意をする。時は一番鶏が鳴く夜明だった。ところが、叔父は孤立した外祖母が母屋からもれる明かりに引き寄せられて近づき足音を警察のものと早合点して逃亡する。

引き裂かれた家族の悲劇は占いと信仰によつてでしか昇華されることはなかった。これは『いらだつ人々』の元銀行頭取の狂気に通底するものといえよう。

祖母と外祖母の和解は占いと信仰を共有することで到達する。占いで告げられた「ある日、ある時刻」に出現したのは叔父ではなく大蛇だった。引用六にあるように外祖母はこの大蛇を叔父の化身として手厚く扱い、裏庭から逃がしてやる。大蛇に心情を仮託することで恨(ハン)を解く。ここに、シャーマニズムの恨プリが具象化されている。

(7) 『伝説』⁽⁹⁾ 申京淑(シン キョンスギ)

① 1994年

② 1950年

③ 言葉を探し歩く語り手である「私」は偶然敵産家屋(植民地時

代、日本人の財産となっていた家屋」を目にする。狭い庭には一本のリンゴの木が花を咲かせていた。小さかった頃、新婚まもなく夫を亡くしたおばは幼い「私」を膝の上にすわらせ、わらぶき屋根の泥の天井の中には家の守り主であるアオダイショウが住み着いているという。「私」が偶然見つけた敵産家屋はおばが育った家であった。

おばは乳飲み子の時、父の友人である夫の屋敷に預けられた。夫の父は不穏な情勢に焦り二人を夫婦にして敵産家屋に住まわせた。だが、戦争が勃発するや、夫は国軍に志願するという。おばは夫の無事を祈るが、夫は帰らぬ人となってしまった。おばは戦争の混乱の最中見知らぬ婦人から乳飲み子を預かることになった。その乳飲み子が「私」である。「私」はリンゴの木からおばにまつわる話をきく。

〔引用一〕

日本の支配が終わり、米軍政が終わり、李承晩政権がさまざまな不安をかかえて成立した頃。親日勢力が米軍政の下でもそのまま生き残ったせいで、わが国は植民地ではなくなったものの、解放された民族国家とはほど遠い状態であった。略。五〇年六月二五日の戦争勃発前から、南北のあいだでは小規模な武力衝突がたえなかつた。そんな不安の中でも、リンゴの木には

花が咲き実もなる。

〔引用二〕

九歳の時に女はあの木の下で首飾りをなくした。肌身離さず身につけていた首飾りを、男に見せてやろうと初めてはずした日のことだった。首飾りの中ほどについているかぎりの部分のふたをあけると、父親がその中で気恥ずかしそうに笑っていた。

〔引用三〕

数えて三歳の時、女は祖母を失い、母親を喪った。女の父は祖父の残した果樹園と店を処分し真つ暗な夜ふけ満州に旅立ったという。残っていた女たちは駐在所に連れていかれた。椅子に縛りつけられ手足がちぎれるほどのひどい拷問にあう。

〔引用四〕

女はたずねる。

「おばさん！ 私は誰なの」

「坊っちゃんまの愛しておられる人ですよ」

乳母は女の皮膚の中にまでしみついている涙のあとをぬぐう。

お坊っちゃんとおまえはあのリンゴの木の下で初めて会ったのよ。私がリンゴの木の下に腰かけてお坊っちゃんに乳をあげている時、旦那様がおまえを連れてきたのだから。お坊っちゃんにあげていた乳をおまえに吸わせたら、お坊っちゃんはおまえ、本当にあきれくらゐに泣いたのだよ。おまえは動じなかったね。泣きもしなかったし。私も聞いたわ、おばさん。私はその時から彼がずっと私のそばにいる人のように感じられたの。乳母はクシを持ったまま、抱かれています女の子をのぞき込み、布切れを握っているその子の顔を見やると、この子は誰かとたずねる。女はいう。私よ、おばさん、思い出せない？

〔引用五〕

半島を焼け野原にした戦争は一五〇万人の死者と三六〇万人の負傷者を生んだ。略。一九五三年七月二十七日、国連軍と人民軍とのあいだの協定で休戦状態に入る。男は帰らない。略。南北の敵対感はずますます深まり民族分断体制はさらに強まってくる。略。三年後、また四月の朝、今は少女となった女の子を連れ、乳母の葬儀に来た女はやり切れぬさびしさに、リンゴの木を敵産家屋に移すことを思い立つ。人夫たちがリンゴの木のまわりを半分くらい掘った時だ。掘り出された土の中から何かがキラリと光る。幼い時に女がなくなってしまう泣いた、あの首飾

りだ。女は驚いてリンゴの木を移す作業を中断させ首飾りを手にとるとふたをあげる。と、これはどうしたことか。気恥ずかしそうに笑っていた父親の写真はそこにはなく、戦場に行った男のきまり悪そうな笑う顔がある。

〔私評〕

植民地時代の悲哀と解放後の混乱と戦争の悲惨を女性独特の感性で描いた作品といえる。リンゴの木と首飾りが重層的な時間の流れを象徴的に成立させている。朝鮮戦争という大きな歴史的事変に翻弄される女の悲恋を感傷的に扱わず、メタファーとして昇華させている。

作者の申京淑は現代韓国のニューウェーブの作家として知られている。私は一九九八年大阪で開催された韓国文学者シンポジウムの打ち上げの宴席で申京淑と同席する機会があったので、彼女に「分断という現実があなたの作品におよぼす影響はどんなものか」と質問をしたことがある。彼女が繊細な声で答えてくれた内容の概要は直接的に分断の現実を作品に取り込むようなことはないというものだった、と記憶している。

だけど愛するものの喪失感が基調に流れている『伝説』は植民地時代と解放と分断と朝鮮戦争を真つ向から受け止めた作品だ。

引用一にある「日本の支配が終わり、米軍政が終わり、李承晩政

権がさまざまな不安をかかえて成立した頃。親日勢力が米軍政の下でもそのまま生き残ったせいで、わが国は植民地ではなくなつたものの、解放された民族国家とはほど遠い状態であつた。」というくだりは的確に韓国の成立を捉えている。

私はあらためて韓国作家の意識の基底には禁忌と自由が葛藤する形で潜在し、禁忌を打破しようとする志向の先に自由が光り輝くものとしてあることを思う。

(8) 『太白山脈』⁽¹⁰⁾ 趙廷来 (チョ ジョンネ)

① 1983年より1989年まで

② 1948年

③ 敵産家屋をうまく手に入れた酒造場鄭鉉東の息子鄭ハソプは南半分の単独選挙反対闘争で蜂起した左翼勢力の一員であつた。左翼勢力は済州島四・三事件鎮圧軍として麗水に投入された国軍が反乱するのに対応して立ち上がったのである。左翼勢力が制圧した筏橋(ポルギョ)では地主をはじめ反動分子の粛正が繰り広げられた。しかし、国軍による鎮圧で後退を余儀なくされた左翼勢力は山に立てこもる。左翼勢力は武装ゲリラと化す。鄭ハソプは巫女の娘素花(ソファ)に匿われる。素花は秘かに鄭ハソプを慕っていた。鄭ハソプと素花が結ばれるのは必然といえた。

素花は危険を覚悟で鄭ハソプの指示通りに地下活動の資金集めに動く。筏橋の有力者の息子金範佑(キム・ポム)は先輩にあたる武

装ゲリラの指導者廉相鎮(ヨム・サンジン)には批判的であつた。また、廉相鎮の弟廉相九(ヨム・サング)は札付きの悪で兄を目の敵にしてゲリラ狩りの急先鋒を務める。筏橋は混沌とする朝鮮半島の縮図となつていく。

〔引用一〕

事態は我々に少々不利に展開している。これから私の言うことをよく聞いてください。これは党の命令です。

党の命令と言われて、鄭ハソプは反射的に不動の姿勢をとり、緊張した。それは、事態は少々不利といった程度ではないことを示していた。自分たちが取らなければならない行動は、決定的な敗北だつた。

略。

長い堤防伝いに視線を走らせていた鄭ハソプの目は、その先にある地点で止まつた。実家が見えるはずなのに、彼は目を細めて見つめた。略。しかし、筏橋の町はもはや近づくことのできない危険な地帯だつた。

〔引用二〕

素花は、男の衝動的な感情の変化を鋭く察知した。彼女は男

の苦しげな忍耐を冷やかに見つめながら、心の鎧を一枚ずつ脱ぎ捨てていった。彼女は男の感情が正しいに堰を切ってしまう予感に襲われ、そうなら彼を素直に受け入れなくてはと思ひ、神が乗り移った時の、あの戦慄に似たものを感じていた。そんな彼女の意識の中に、はるか昔の記憶が一枚の鮮明な写真のように浮かんで来た。鄭ハソプが小学四年生の時だったか、彼の祖父の四十九日のクツが行なわれた。他家の四十九日とは、違い、母は狂ったようにクツにのめり込んでいた。

略。

おい。

男の声に、彼女はぱつと立ち上がった。ハソプという名の、その家の息子が立っていた。彼が差し出した手には黄金色に熟した枇杷が二つあった。彼女はどうしたらよいのか分からず、彼の目だけをじつと見つめていた。

食えよ。

男の子はぶつきらぼうに言った。彼女は断わることのできない威圧感を覚えた。息が詰まりそうな重苦しさを感じながらも手を伸ばし、枇杷を一つ取った。

〔引用三〕

「まったく、巡査の耳にでも入ったらこっぴどく叩きのめされ

る話だども、若旦那様の前だから言いやすが、なんで、みんなが共産党になったかご存じでやすか。お上は農地改革をやると大口を叩くばかりで一日延ばしにするし、地主は地主で好き勝手なことをするもんで、貧しくて学のねえ者たちは誰を信じ、頼つたらええのかさっぱり分かりやせんでした。そこへアカの天下になりや、地主をすつかりなくして、その田畑も分けてもらえるつちゅう話だ。それで共産党にならねえ者がいやすか言つちやあなんどだども、お上が共産党を作り出し、地主がアカを生むんでやす」

文書房を無学だときめつけることはできない。金範佑は答えに窮した。

〔引用四〕

鮮于進が金範佑の腕を引つ張った。彼のさりげない言葉が、金範佑の胸に大きな波紋となって広がった。彼は一九四六年の春、北の黄海道から南に逃げてきた人物だった。北の農地改革で地主だった彼の家は没落を余儀なくされ、三十八度線を越えるしかなかったのである。土地はもちろん家財道具まで没収されたどさくさで、大学の卒業書を紛失し、卒業アルバムだけを持って南にやって来た彼のエピソードは、他の教師たちの笑い話のタネだった。感情が高ぶると、他の避難民たちのように警

察に身を投じ、アカどもを捕まえ、片っぱしから殺してやりた
いと口癖のように言った。

〔私評〕

『太白山脈』は「アカ」と呼ばれた共産ゲリラを等身大に描いた、まさに禁忌を打破する作品である。作者趙廷来には並々ならぬ決意と勇気があったといえる。趙廷来は一九九九年五月来日して『太白山脈』翻訳刊行記念講演を行なった。その講演で趙廷来は『太白山脈』を書く内的動機を次のように語っている。

「私は『太白山脈』を書くことによって二つのことを実現させようと決意しました。まず一つは反共主義によって歪められてきた歴史の事実をありのまま記録することです。略。韓国の反共主義の下ではアメリカや米軍の仕出かした過ちをありのまま書けば反米・利敵行為をしたとして国家保安法に引掛かるし、北の人民軍やパルチザンのしたこともありのまま書いてもやはり容共・利敵行為をしたとされるのです。これは北でもまったく同じ状況であることは間違いありません。二つめの目標は、韓国が解放を迎える一九四五年から朝鮮戦争が休戦する一九五三年までに活動していた社会主義者やパルチザンを悪魔や鬼ではなく人間として描き、彼らが追い求めていた歴史の真実とは何であり、彼らの人間的な苦しみや痛みはどのようなものであったかを掘り起こそうというものでした。」

韓国には「分断文学」というものがある。意識ある韓国の作家がテーマとする文学はほとんどがこの「分断文学」と呼ばれる。これは分断イデオロギーに呪縛された文学と言い換えることもできる。反米・容共は禁忌であるだけに、不自由な制約の下に作品を書かざるをえない。

文学とは禁忌となるものを直接描くのではなく、暗喩と象徴の手法で描くものである、という説も成り立つ。いや、むしろそれが文学の正統な表現方法ではないか。例えば、自身のバックグラウンドを「路地」として描いた中上健次の『岬』や『枯木灘』は暗喩と象徴の手法で成功した作品といえる。

中上健次は自身のバックグラウンドを直接に描くことも可能な状況にあった。つまりは中上健次の文学は個人の志向のレベルとして捉えることである。しかし、韓国においては個人の志向のレベルとして反米・容共的な作品を描くこと自体が法的に拘束される。リズムが禁忌に抵触するからである。

『蟹工船』と『党生活者』の小林多喜二を拷問死に追いやった日本の帝国主義の残滓は韓国の軍事独裁に引き継がれ、例えば『五賊』の金芝河を拘束する。軍事独裁が文民政権に委譲されたことで韓国は成熟期に向かうことができた。韓国の成熟は禁忌をリアリズムで描く素地を備えるに至ったと思える。



金吉浩氏

李浩哲氏

李浩哲夫人

金真須美氏

玄月氏

金時鐘氏

筆者

結び

以上、解放後の韓国文学を概観してきたが、一貫して流れているのは「植民地」と「分断」と「戦争」の傷痕である。作家はその傷痕を創作の源泉とし、時には偏狭なイデオロギーに捉われて呻吟しながらもやがて時代の成熟に合わせて禁忌の殻を打ち破り、とらわれの精神を解き放つ。時あたかも本年六月南北首脳会談がピョンヤンで実現して、北と南の両首脳が握手する姿が全世界に放映された記憶は真新しい。離散家族再会も小規模なりに現実のものとなっている。

今世紀中の統一は不可能となってしまうが、二十一世紀のはじめには敵対と不信と憎悪の暗闇を抜け出し緩やかな統一の光が射し込んでくることを願ってやまない。

文学はそれでも何らかの禁忌を相伴し、自由への飛翔を試みて模索していくことだろう。

さて、この論考の結びを書いている最中に、詩人の金時鐘氏から、『いらだつ人々』の作者李浩哲氏が来阪されるので歓迎会を持つことになった。ついては是非顔を出すようにという連絡があった。私は一九九六年ソウルで開催された「ハンミンジョック ムナギンテフェ」^①で李浩哲氏と会っている。天真爛漫で人懐っこい人柄が印象的だった。

歓迎会は十月十三日（金）の夕方韓国風居酒屋で行なわれた。同

席者には在日作家の金吉浩氏や玄月氏に金真須美氏も混じっていた。折しも、金大中大統領がノーベル平和賞を受賞したとの報せが入って歓迎会は一転祝賀会の様相を呈した。(写真参照)

なるほど、世界は南北首脳会談を固唾を飲んで見守っていたのだ、ということを私は実感した。

この歓迎会の席上、私は李浩哲氏に韓国文学における禁忌と自由についての質問をした。李浩哲氏は達者な日本語で、

「一九六一年の思想界三月号に『板門店』という短編小説を書いたんだが、五月十六日の軍事クーデターがあつて追われる窮地に陥つたよ」と語られた。

そこで私が、

「サ・イルグ(四・一九)⁽¹³⁾から軍事クーデター⁽¹⁴⁾が起こるまで束の間の自由があつたわけですね」と訊くと、

李浩哲氏は、

「まったくその通りだ」と答えられた。

私の論考では残念ながら「束の間の自由」の期間に書かれた小説に触れていない。歓迎会での李浩哲氏のお話を伺うまで私は禁忌が破られた「束の間の自由」に考えがおよばなかつたというのが正直なところだ。

ともあれ、この論考を書き終えるにあたって李浩哲氏との再会と金大中大統領ノーベル平和賞受賞の吉報が同時だったのは何とも感慨深いものがある。

註

(1) 「バルチザン伝説」桐山製 作品社 一九八四年六月一〇日発行

作者のあとがきによれば次のように書かれている。

「バルチザン伝説」は、予想だにしない数奇な運命を辿つてまいりました。

この始まりは、昨年(註一九八三年)の九月、文芸雑誌(註文藝)に掲載されてから三週間後に、(S)という著名な出版社の週刊誌が「天皇暗殺」を扱った小説の「発表」という兇々しい見出しを掲げて作品を取り扱い、「第二の風流夢譚か——」ときわめて意図的な宣伝を展開したことに在ります。

略

案の定、その作品は単なる(不敬譚)であると取り違えた右翼団体の攻撃によって、単行本化は中止されました。

(註) ここで「バルチザン伝説」刊行委員会が結成され文学作品として刊行される運びとなった)

(2) 「乱れた大気」アーウィン・ショー 工藤政司訳 マガジンハウス 一九九四年二月四日発行

訳者のあとがきによれば次のように書かれている。

ベストセラーとして空前の売れゆきをみせる中、この作品に対する反対、それも全米在郷軍人会のハリウッドに対する圧力である。また、脚色してイースト・サイド劇場の舞台上で上演する計画は、劇場にピケを張つて関係者をブラックリストに載せる、という右翼団体の脅迫の前に潰えさつた。

こうしてショー夫妻はアメリカを捨て、スイスに向けて旅立つ。

(3) 「背面」鮮于輝 「韓国文学13人集」古山高麗雄編 新潮社 昭和五十六年十一月発行

(4) 「庄殺」金源一 「韓国短篇小説選」大村益夫・長璋吉・三枝壽勝編訳 岩波書店 一九八八年九月二日発行

(5) 「トリヨン岬の鳥」玄基栄 「韓国短篇小説選」

- (6) 『興南撤収』金東里 「韓国短篇小説選」
- (7) 『いらだつ人々』李浩哲 「韓国短篇小説選」
- (8) 『長雨』尹興吉 姜舜訳 東京新聞出版局 昭和五十四年四月二十日発行
- (9) 『伝説』申京淑 石坂浩一訳 「新韓国読本⑧」 社会評論社 一九九八年十月二十日発行
- (10) 『太白山脈』趙廷来・監修・尹學準 校閲・川村濤 筒井真樹子／安岡明子／神谷丹路／川村亜子訳 集英社 一九九九年十月十日発行
- (11) 文芸誌「すばる」一九九七年一月号に掲載された私の『ハンミンジョック ムナギンテフェ』体験記から抜粋することにする。
「ハンミンジョック ムナギンテフェ」を手づ取り早く日本語訳すると、「韓民族文学人大会」となる。漢字は表意文字だけに、時には意味合いが狭く収斂される場合がある。ハングル表記だと、「^ハ」の「文字が三通りの掛け言葉になる。「^ハ」の民族の「ハン」、「^ハ」の「文字が三つの」の「ハン」という具合にね。まあ、南北に分断されたコリアンの「統一」への願いが込められた「文学人大会」とでもいえるだろう。招請された海外同胞が在住する国は実に多彩だ。
- (12) 『思想界』は一九五四年から一九七〇年の間に大韓民国で発行された総合雑誌(註 朝鮮語大辞典 角川書店)
- (13) 李承晩独裁政権は一九六〇年四月十九日学生革命によって打倒された。
- (14) 一九六〇年五月十六日朴正熙を中心とする韓国軍部によって引き起こされたクーデター。朴正熙は強力な独裁体制によって「漢江の奇跡」といわれる経済成長を推進した。外勢に依存した経済成長は大きな歪みを生み出した。民主化と統一を旗印に朴正熙を脅かすライバル金大中が幾度も九死に一生を得ながらも、不屈の精神で遂に大統領になることができたのは「韓国の奇跡」といっても過言ではないだろう。

The Taboos and the Freedom of Korean Literature

Won Sooil

In the Republic of Korea, the nation established in the southern half of Korean Peninsula which has been divided into two, the speech to serve the interests of North Korea has been a taboo. The acts to serve the interests of North Korea has not only meant the speech to praise the North, but it has also been a taboo for the writes who left the North to live in the South describe their home country.

Although they were liberated from the Japanese Imperialism and realized the independence, they were to fight the way of proxy in the Cold War between the Soviet Union and the U. S. A., and the sorrow of separated families and the hatred and distrust of the same tribes remained. Korean writers have been cast a spell on the hatred and distrust (ideology of division between two Koreas) and suppressed to write freely.

Growing out of the ideology of division between two Koreas can be said to be the proposition to get away from the taboos and to get the freedom of souls. It has also been a hard work to dig up the hidden history.

In this paper, through the outlines, quotations, and my personal review of the literary works in Korea after the liberation, the taboos and the freedom of Korean literature are discussed.